

「私の証し」

聖学院大学 人文学部 110A 和 瑩

皆さん' こんにちは！ 私は、中国からの留学生でクリスチャンのワ エイと申します。欧米文化学科の4年生です。今日、みなさんの前で話させていただけることを感謝いたします。少し時間をいただいて、自分がどうしてクリスチャンになったのかということをお話させていただきたいと思います。

私が子供のころ、学校で受けた教育では、たとえば、人間について、それはサルから進化したものであるという、いわゆる進化論を教えられており、私もそれ以上のことは何も深く考えていませんでした。ましてや神さまの救いのご計画のことなどについては考えてみたこともありませんでした。

しかし、高校3年生のときに父親が天に召されるという大きな出来事がありました。そのとき、悲しみにくれた私は、人生の真理とは何なのかということを考えるようになりました。人間はどこから来るのか？ 人間はなぜ、何のために生きているのか？ 人間は死んだら、どこへ行くのか？ どんな人生が本当に有意義な人生なのか？ そんなことを考え始めるようになりました。しかし、その真理が見付からず、戸惑うばかりでした。

そのような中で、2005年に中国で大学に進学し、そこで初めて私はイエス・キリストの福音に触れました。そして、「わたしは道であり、真理であり、命である」という、ヨハネによる福音書第14章6節の御言葉が目にとまり、心を打たれ、そのときから聖書やキリスト教に関心を持つようになりました。そして、大学で、クリスチャンの友人と出会いました。もちろんまだ私は洗礼を受けたクリスチャンではありませんでしたが、クリスチャンの友だちは、信仰を持っていない人たちとは何かが違うと感じました。イエス・キリストに繋がっている人たちの中には、見えない強い力が宿っていると実感することもありました。

そしてその後、私は教会に行くようになりました。中国では、特に戦争後、政府の方針に従わないキリスト教会は弾圧や迫害を受けてきました。そのような状況の中で、政府からは非公認の形で自分たちの信仰を守り続けてきた「家の教会」とよばれるものがあり、私はその「家の教会」に連なる者となりました。そこでの兄弟姉妹たちを見ていると、さまざまな苦難や困難の中で、神さまに対する愛は消えるどころか、逆に信仰が強められているようで、とても不思議なことだと思いました。

思えば、中国だけでなく、世界中で、二千年前から今に至るまで、多くのクリスチャンたちは、自分の利益や都合だけを考えず、人生を神さまに捧げ、信仰のために命も捨てることも躊躇いませんでした。そしてまた、キリスト教は、人類の進歩発展の上にも大きな役割を果たしてきました。それもやはり、クリスチャンには、大きな力が与えられているからだと思うのです。

私自身のことに戻るならば、いろいろとわからないこともありながら礼拝に出席し、聖書を学び、友人たちとさまざまなことを分かち合いました。その中で、聖霊の助けにより、イエスさまは私たちと共にいてくださる方であることを確かに知ることができるようになりました。そして、教会に行くようになってから1年半たったころ、洗礼を授けていただきました。自分の人生を神さまに捧げるという決心が与えられたのです。

ところで、私が信じている神さまは、ご自身が知恵そのものであり、また真理そのものであるお方です。もしそうでなければ、信仰というものも、人を欺くようなものになり兼ねません。実際のところ、歴史を振り返ってみると、科学者などの中にもクリスチャンが多くいます。ニュートンや、ガリレオや、コペルニクスなどがそうです。そして、科学をも導いてくださる神様はまた、私たち一人一人を深く愛してく

ださるお方です。しかし、それに対して、人間の愛は限りあるもので、完全なものではありません。私自身、両親の愛に応えられない、弱い自分を責めたりしたこともあります。しかし、そのような完全とはほど遠い私のことをも神さまは愛してくださり、その神さまの愛の中で、私たちは本当に自由になることができるのです。

それでも、こんな至らない自分が神さまに愛されるのかと疑いをもち、落ち込んだこともあります。しかしそういうときこそ、神の御言葉から癒しをいただくことができました。コリント人への手紙二の第12章9節にはこのように記されています。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ…だから、キリストの力が私の内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」。

聖書を通して、神さまは、私たちに語りかけてくださいます。それは、私自身の日常的な悩みにも語りかけてくるものでした。たとえば、バイトがなくて、食事をするお金もないほどの時がありました。そのようなとき、御言葉は、「空の鳥を見るがよい、播くことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなた方の天の父は彼らを養ってくださる」と私に語りかけてくださいました。どんな時でも、神様は私のために必要なものを備えてくださるのだから、心配しなくてもよい、と言ってくださったのです。

また、時に、自分には全く知恵も能力もない、と思い詰めてしまうようなとき、御言葉には、「キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖と贖いとになられたのである」とありました。自分の能力のなさをただ悲しむのではなく、贖い主イエス・キリストご自身の限りない知恵と真実に寄り頼むことを、私はそこで教えられたのです。

さらに、いきづまってどうしようもない時、御言葉はこう語りかけてくれました。「だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。私たちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、私たちは主のものなのである」とありました。私たちは自分自身のために生きるのではなく、主のために生き、そして死ぬのだ、ということを示すこの御言葉に、私は目を開かれる思いでした。私の命もすべて主が備えてくださっているのだから、すべてを主に委ねて安心してよいのだと思いました。そして主に仰ぎ、自分ができる限り、積極的に頑張ろうと生きていけるようになりました。

主イエスに出会うまで、私は人生の意味が分かりませんでした。しかし今は、御言葉と祈りを通して、イエスさまが人生の意味を示してくださることを知っています。素晴らしい神様は小さい私をも深く愛してくださっています。ですから、自分のためではなく、神様の栄光のために生きることができるなら、素晴らしい人生を送れると思います。どうぞ皆さん、まず、真実、全能、愛、聖なる神様を人生の主として、受け入れてください！ 不思議な祝福が与えられることでしょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、証しの時が与えられました恵みに感謝いたします。寂しい時、悲しい時、困っている時、いつでも主よ、あなたが私たちと共にいてくださることを感謝します。どうか、まだあなたのことを知らない人々も、このただ一度の人生において、真実の神様と出会うことができますように。

主イエス・キリストのみ名を通してお祈り致します。アーメン。

2013年11月27日 聖学院大学 全学礼拝(学生の証し)